

第40回

黒森歌舞伎衣裳展

1階／城輪柵跡展



開催期間／1986年9月3日～9月28日

開館時間／9時30分～16時30分

休館日／月曜日・祝日

入館料／大人100円・児童生徒50円

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16 TEL(0234)24-6544

開催にあたって

酒田市大字黒森にある黒森歌舞伎は、今を去る 250 年前から農民の手によって生まれ、伝承されてきた芝居で、地芝居ともいわれ、歴史的にも古く、スケールの大きさ、出し物の多いことで全国に知られている郷土が生んだ農民歌舞伎である。その特色は、妻堂連中とよばれる座が組織され、一切をとりしきっていること。又芝居という古い風俗を遺していること。特に厳冬期の 2 月の公演は、役者と見物衆が一体となって野外観客席がわきたつ光景がみられること等あげられる。

今回、黒森歌舞伎の座と保存会の協力を得て、公演時に着用する衣裳や紅花染・藍染の衣裳並びに鬘・小道具・文書等を展示し、黒森歌舞伎への認識を深めていただくよう展示した次第である。

展示にあたって資料を提供された座と保存会に厚くお礼申し上げます。

- 昭和37年 齋藤茂吉文化賞受賞
- 昭和45年 河北文化賞受賞
- 昭和48年 山形県指定無形文化財に指定される
- 昭和57年 東京都に出張公演



紅
花
着

展示目録

◎文 書

- | | |
|---------------|-----|
| 1. 三社御面由来書 | 1 卷 |
| 2. 御面奉納一札の写 | 1 卷 |
| 3. 日枝神社祭典寄附台帳 | 1 冊 |
| 4. 妻堂連規約及人名簿 | 1 冊 |
| 5. 妻堂台帳 | 2 冊 |
| 6. 黒森歌舞伎台帳 | 1 冊 |

◎狂言台本

- | | |
|------------|-----|
| 1. 義経千本桜 | 5 冊 |
| 2. 假名手本忠臣蔵 | 4 冊 |
| 3. 伽羅先代萩 | 3 冊 |
| 4. 絵本太功記 | 6 冊 |
| 5. 源平布引滝 | 2 冊 |
| 6. 菅原傳授手習鑑 | 6 冊 |
| 7. 近江源氏先陣館 | 3 冊 |

◎衣 裳

1. 錦着赤袴
「伽羅先代萩」床下の場。荒獅子男之助他荒事に着用する。
2. 鶴の打掛
「伽羅先代萩」竹の間の場。局沖の井。御殿上流の女寮に着用する。
3. 竹の打掛
「伽羅先代萩」竹の間の場。乳人政岡専用の打掛。
4. 藤の打掛
「伽羅先代萩」竹の間の場。局八汐御殿上流の年寄が着用する。
5. 松島の打掛
「伽羅先代萩」竹の間の場。松島が着用する。



藍
染
着

6. 雀の着物
「伽羅先代萩」竹の間の場。局八汐着用するが、加賀見山舊錦絵の岩藤等も着用する事もある。
7. 菊の袴
「伽羅先代萩」対決の場。渡辺民部、時代狂言の身分ある若手の侍が着用する。
8. 扇の衣
「伽羅先代萩」竹の間の場亀千代。大名の子息が着用する。
9. 赤打掛
「義経千本桜」鳥居前の場。静御前が着用する。
10. 浜四天
「義経千本桜」二段目（二大物の浦）船宿。渡海屋で日和をまつ義経を討伐する相模五郎が侍から漁師にふんする時に着用する。
11. 錦唐獅子
「曾我対面」大磯の虎。時代狂言でおいらんが着用する。
12. 赤錦四天
「絵本太功記」十段目の加藤正清が着用する。
13. 錦唐獅子四天
「絵本太功記」四方天。時代狂言の立役仇討で多く着用する。
14. 麻 袴
「假名手本忠臣蔵」大星由良之助等侍の礼着。
15. 錦の長袴
「源平布引滝」実盛。義経千本桜後段義経等で着用する。
16. 赤錦の長袴
「近江源氏先陣館」和田兵衛が着用する。
17. 娘着、振袖
時代狂言の姫御寮が着用する。
18. 老婆の打掛
「奥州安達ヶ原」三段目の浜夕が着用する。
19. 錦 着



錦着赤袴
(先代萩の男之助着用)

- 20. 紅花着
- 21. 藍染着

◎鬘 くかつら

- 1. 大百日 (男方) 1点
「菅原傳授手習鑑」寺小屋の松王丸お目見得だんまりの主役が使用する。
- 2. 片はずし (女方) 御殿女中が使用する。 2点
- 3. 勝山 (女方) 御殿女中が使用する。 1点
- 4. 子役千松 (男方) 子役千松が使用する。 1点
- 5. 子役亀千代 (男方) 子役亀千代が使用する。 1点
- 6. 武者まげ (男方) 戦場の侍が使用する。 1点
- 7. 「假名手本忠臣蔵」由良之助まげ (男方) 1点
油付け中年の侍が使用する。

◎伽羅先代萩竹の間の場で使用する小道具

- 1. 刀 掛 侍が大小の刀を掛ける台。
- 2. 脇 息 殿様のひじかけ。
- 3. 雀の鳥かご
- 4. 釜

◎その他小道具

- 1. お 膳 2. タバコ盆 3. キセル
- 4. 龕 燈 5. ちょうちん

◎幟 (黒森歌舞伎公演用)

◎写真 (黒森歌舞伎関係) 15点 土門拳記念館蔵

◎その他資料

- 1. 黒森歌舞伎、大山 功著
- 2. 山形県民俗・歴史論集 1冊 酒田市立図書館蔵
- 3. 赤川流域、菅原繁治郎・写真集 1冊 酒田市立図書館蔵
- 4. 黒森歌舞伎御案内 19部



竹の打掛
(先代萩の政岡着用)

黒森新舞伎

山形県指定無形民俗文化財

風雪に堪えて250年

むかし、稀代の盗賊といわれた熊坂長範の子孫と輩下の田村奎之頭ら一族が、黒森に流れ住んで、よからぬ所業を重ねていたために、村びとの間にまで盗みや、とぼくが流行し、風紀はみだれ、村の生活はすさんでゆく一方であった。のちに、これを改めさせ、勧善懲悪の思想を普及しようとして、与作という人が若勢連中に芝居をさせたのが、黒森芝居の起りである、というのがこの部落にのこる伝説である。

それから、ここに1通の文書と1対の翁の面がある。文書は75才で没した与作の50回忌にあたる天保9年に書かれたもので、与作が享保20年、21才のときにこの面を刻んだものだが、これを道祖神の祭り（黒森芝居正月興行のことと思われる）に奉納していたが、大切に用い取り扱うという意味のことが書かれていて、村の代表者5人が印を押し、与作の家とその親族に宛てたものである。与作は塗師だったといわれるが、彫刻の技巧にもすぐれ、村の指導者でもあったらしい。翁の面はしろうとの手になるものとは思えぬ程立派なもので、黒森ではこの面を神霊が宿っているものとして扱い、正月恒例の公演のさいも、まずお面開きの行事から始まり、式三番叟が舞われ、それから芝居の幕があげられている。

また**古老の語る**ところによると、享保の初め頃越後の方からやってきた江戸の下り芝居（旅役者のこと）をみた村びとがそれをまね、習いおぼえて演ずるようになったのが黒森芝居のはじまりで、与作がお面を作ったのはあとになってからのことだという。そして面白いことに、村の古老達は翁の面にまつわる“いいつたえ、が絶えてしまうことを恐れてつぎのようなことを文書にしたため、遺している。

享保の頃、村に佐之助という芸好きの者がいた。この人は田畑の耕作も顧みないで能や芸居に熱中し、あるときは旅役者の一

座にはいって修業をしたりした程の芸達者でもあった。

あるとき、旅役者の一座が大山で興行をして酒田に向かう途中、一夜黒森に引き止め、山海の珍味でもてなし、一座の者が酔いつぶれて眠ったあとで、佐之助と与作の2人が、一座の持っていた翁の面の型をとり、後日与作がそれをもとにしてこのお面を作ったものである、と。(昭和8年記)

黒森では、今も翁の面は与作の子孫が保管し、三番叟では佐之助の子孫が翁を演ずるしきたりを守っているが、そうした由来によるものである。

元来は黒森芝居(この地方では、しばやと発音する)と呼ばれていたものが、昭和31年保存会がつくられたときに、黒森歌舞伎と改めて呼ぶことになった。

黒森歌舞伎は、およそ250年の間、この村の農民によって伝承されてきた農民歌舞伎である。妻堂連中と呼ばれる組織があって、これが一座をなし、芝居を上演するほか、黒森歌舞伎の運営を受け持ち、鎮守日枝神社の祭典に関する重要な役割も持っている。

この妻堂連中には、どういうわけか原則として他所者(よそも)が加わることは許されなかった。いつの頃からか裏方には辛うじて参加できるようになったが、俳優と浄瑠璃語りは必ず黒森で出生した者でないとつとめられないというきまりは今も守られている。

妻堂連中の役割りは概ね世襲であった。そしておのおの分担に応じて、祖父や父が子弟に厳格に伝え移していったものであって、それが今日の黒森歌舞伎隆盛のもとをなすゆえんとなったのであるが、時代が移って、今では世襲といえる程ではなくなったが、そういう意識はまだ残っている。

寒中芝居と呼ばれる2月15日、17日の公演は、旧暦の正月にあたり、むかしから定まっている吉例興行で、2日とも同じ外題をくり返して行なわれる。はじめの頃は15日1日だけの公演だったろうという人もいるが、記録によれば正月15日と17日になっていて、なかには1日だけのこともあり3日間も続けられたときもあったりしたが、恒例としては2日興行であったとみられる。

ながい間には、悪天候のため止むなく1日で終ることもあり、また連日大入満員で3日間も芝居を続けたりしたこともあったのであろう。ちなみに、この時期は1年で最も心の休まる農閑期で

あり、雪もほどよく積もる季節とあって雪芝居を生んだ農民の知恵がそこにはうかがわれる。

黒森歌舞伎の特色は、芝居が組立舞台で演ぜられ、観客が野外で見物するその様子がいかにも“芝居、という古い風俗を遺していることと、歌舞伎の演出法のなかに、古い型式の手法が遺されている点と、一貫して、この部落の農民たちの手で演ぜられ、継承されてきたことなどがあげられる。

ただきわめて残念なことに、組立舞台は昭和38年11月に姿を消し、(日本の演劇史、舞台史の研究に有力な資料として注目されていたものだけに、惜しまれることしきりである) 今では常設の舞台となったが、客席はいぜんとして野外に設けられ、降りつむ雪の中で見物するむかしそのままの情景はまことに野趣にみち、古く遠い時代を再現し、みる人の素朴であたたかい情感をよみがえらせてくれる。

演ぜられる狂言は、およそ50程もあって、それが全部時代物(古典歌舞伎)である。

正月公演ではその中の一外題をとりあげ、それを本狂言とし全通しで上演するのを常としている。近頃は後継者養成のために若手俳優だけで二番狂言を一幕もつようなこともあるが、元来はひとつの狂言をながながと演じつづけたものであった。

その年の狂言を決定するのに、太夫振舞という行事がある。前年3月の初旬残雪の頃に行なわれるもので、注連縄(しめなわ)で浄められた境内の一角で、精進潔斎をした部落の若者が冷水を浴び、あらかじめ神前に供えられた数本の狂言の中からひとつを選ぶという、すなわちご神籤によって決定する行事である。黒森歌舞伎は、神事芸能的な要素を多く加えているといわれるが、この太夫振舞にしてもそうだし、また観客が芝居見物をしながらたべご馳走でも、生臭ものや酒類を一切持ち込まぬという習慣などもそうであった。芝居が神の心を鎮め、豊作を祈念する奉納芸能であって、ひとびとの信仰によってながいあいだ支えられてきていることは、黒森歌舞伎のもつ民俗芸能としての特色でもあろう。

〈黒森歌舞伎保存会〉